

シンポジウム

看護実践の場で活かす補完代替療法

座長：種池 禮子・小山 敦代（明治国際医療大学看護学部）

看護で活かす鍼灸治療とツボ療法—緩和医療における鍼灸治療—

福田 文彦（明治国際医療大学鍼灸学部）

【略歴】 1988年明治鍼灸大学卒業，1991年明治鍼灸大学助手，2002年同講師，2008年より現職。2006年からは大阪大学大学院生体機能補完医学講座特認研究員。看護関係では，1998年より京都市立看護短期大学，2008年より愛知県立看護大学（がん性疼痛看護認定看護師教育課程）の非常勤講師。

専門は，緩和医療における鍼灸治療，ストレス疾患に対する鍼灸治療の臨床及び基礎研究。

【要旨】 鍼灸医学では，人の心と身体は常に一体となって変化（心身一如）すると考え，その作用機序は身体が持っている自然治癒力の賦活であるとともに，薬物を使わない非薬物療法である。鍼灸治療の診療・治療過程では患者の身体によく触れる（身体感覚を通してのコミュニケーション）。鍼灸刺激による治療効果に加えて，この安心・安全で十分なコミュニケーションがとれた治療空間と時間が，身体的苦痛のみでなく，精神的苦痛を緩和させる。

緩和医療における鍼灸治療は，補完医療として行われるが，疾患や患者の状態により適否は異なるため患者ごとでの検討が必要である。効果が期待できる主な症状は，疼痛，手術や化学療法に伴う悪心・嘔吐，口腔内乾燥，血管運動症状（ほてり）などであり，イギリスやアメリカの統合腫瘍学会では，がん患者に対する鍼灸治療のガイドラインも作成されている。

補完・代替医療は，看護師に「実践できるもの」と「実践できないもの」に分類されるが，「できないもの」に対しては，患者さんの相談相手になれる知識が必要であり，「できるもの」に対しては，適応と限界，方法と注意点を理解して実践することが可能である。鍼灸治療は，看護師には実践できないものであるが，鍼灸治療で用いる経穴（けいけつ：ツボ）をタッチケアの中に取り入れることは，看護師にも実践することができる。また，看護師が指導することにより家族や患者本人のセルフコントロールとして行うことも可能である。

本シンポジウムでは，緩和医療，特にがん治療における副作用に対する鍼灸治療の効果を取り上げ，その役割と効果を発表する。この発表が皆さんの鍼灸治療に対する理解とツボを応用したタッチケアに結びつけば幸いである。